

Ⅳ-3 ソウル地域における文化遺産活用の実例—古代城郭遺産を中心に—

尹 星鎬（井上 直樹訳）

1. 序論

朝鮮時代の漢陽都城であるソウルの城郭は、ソウルの代表的城郭遺産である。ソウルの都城はソウル中心部に位置し、アクセスも良好で市民に認知されやすい上に、登山もできるため、さまざまな機関によって活用プログラムが実施されており、活用頻度も比較的高い。ところが、文化遺産に関心の高い市民でさえも、朝鮮時代の城郭以外に、ソウルには別の時代の城郭遺跡が数多く存在していることを知らない。それは城郭遺産に対する広報と活用努力に問題があるからであろう。

朝鮮後期を代表する北漢山城南西城壁の下端部からは、崩壊した城壁の発掘調査過程で高麗時代の南京の防御城であった中興山城の基底部が発見されている。しかし、調査後、朝鮮後期の城壁をベースとした補修が行われたため、それら高麗時代の城壁の痕跡は認知・活用し難い状態である。

それより古い三国時代については、多くの城郭遺産が存在している。三国時代のソウルは、百済－高句麗－新羅が支配したが、その代表例が漢城期の百済の王城であった風納土城、夢村土城である。それ以外にも、韓国では接しがたい典型的な高句麗の城郭遺産もあり、漢城期の百済王城と漢江に面した峨嵋山には、高句麗の堡壘が集中的に存在している。6世紀半ば以後、ソウルは新羅の支配地となったが、峨嵋山には北漢山州の治所城である峨嵋山城が築造された。また、北漢山を防御するため周辺には仏巖山城、大母山城、陽川古城、虎巖山城も築かれた。このように高句麗・百済・新羅角逐の場でもあったソウルには、さまざまな城郭遺産が密集して分布している（白種伍ほか 2001、안성현 2018）。

では、このような古代城郭遺産は実際にどれほど活用されているのだろうか。これまで百済の城郭遺産については、ソウルの百済遺跡全体についての認識不足問題に言及しつつも、その価値と活用方案を検討した研究があり（権五榮 2007、松坡区ほか 2013）、高句麗と新羅の城郭遺産については、遺跡が集中する峨嵋山を中心とした活用プログラムについて、大衆考古学の観点から分析した研究があるものの（강평원 2018）、これまでソウルの古代城郭遺産活用について、学術的な観点から本格的に研究されてこなかった。上記以外の古代城郭遺跡については、整備と活用のための総合整備計画策定過程において、活用案を提案する水準にとどまっているのが現状である（江西区ほか 2009、江南区ほか 2011、衿川区ほか 2014、蘆原区ほか 2016）。

そこで本稿では、ソウル所在の城郭遺産の中でも活用事業が進められている百済の風納土城、高句麗の峨嵋山一帯の堡壘群、新羅の峨嵋山城・虎巖山城を検討してみたい。そのため、第2節では、ソウル地域の城郭遺産の現況を整理する。続く第3節では、文化財庁の支援を得て自治体と民間団体によって主管され、現在実施中の文化財事業と地域文化遺産教育事業の推進

情况进行分析。最後の第4節では、ソウルの古代城郭遺産活用事業の活性化案を提案する。これによってソウルの古代城郭遺産の活用になんらかの貢献できればとおもう。

2. ソウルの城郭遺産の現況

ソウルには前近代すべての時期の城郭遺産が多数存在する。古代に関しては、1980年代以降、百済の風納土城と夢村土城の調査と研究が進められたが、それ以外の古代の城郭遺産の存在は注目されてこなかった。そこで、ソウル市は2003年に全時代の城郭遺産についての現況調査を実施したが（서울市立大学校 2003）、これを契機にその後、上記の遺跡以外にも調査・研究が進められた。それらソウルの時代別城郭遺産と関連内容を整理したものが表1である。

先に序論で述べたように、三国時代のソウルには多数の城郭遺産が築造された。百済王都の漢城、高句麗の南進拠点であった南平壤、新羅の北進基地であった北漢山州の治所が存在したためである。このような城郭遺産は、特定の時期にのみ利用されたわけではなく、運営母体の変化にあわせて改築されて使用されることも多い。朝鮮時代、ソウルの城郭は漢陽都城として造営され、北漢山城と連結する蕩春台城は、丙子胡乱以後、都城防禦のために新たに造築されたものである。なお、朝鮮時代の北漢山城の下部からは、城壁と城郭線を異にする高麗時代の中興山城の痕跡が調査されている（京畿文化財団 2015、京畿文化財団 2017）。さらに史料によれば漢江南岸、ソウルの西郊外に位置する陽川古城は、朝鮮時代に利用されたことが確認できるが、調査の結果、地表面から朝鮮時代の遺物が収拾されたものの、朝鮮戦争後に軍事施設が設置されて、上部文化層が毀損され朝鮮時代の遺物は確認できなかった（한일文化財研究院 2016・2019）。それに対して、虎巖山城では、発掘調査によって内部の建物址と苑池は、高麗・朝鮮時代に継続して利用されていたことが確認されている（서울大学校博物館 1990、漢江文化財研究院 2023）。

百済王城であった風納土城と夢村土城（図1）でも、475年以後南進した高句麗が、6世紀

表1 ソウル地域（京畿道一部を含む）城郭遺跡

	遺跡名	位置	海拔 (m)	周長 (m)	立地	初築時期	築造 材料	平面形態
1	風納土城	ソウル市松坡区	15	3470	平地	三国（百済）	土築	楕円形
2	夢村土城	ソウル市松坡区	44.8	2285	山	三国（百済）	土築	楕円形
3	三成洞土城	ソウル市江南区	3		平地+山	三国（百済）	土築	不定形
4	峨嵯山一帯堡壘群	ソウル市広津・中浪 ・蘆原区／京畿道 九里市			山	三国 (高句麗)	土築+ 石築	円形／ 楕円形
5	峨嵯山城	ソウル市広津区広壮洞	203.4	1043	山	三国（新羅）	石築	菱形
6	仏巖山城	ソウル市蘆原区／ 京畿道 南楊州市	420.3	480	山	三国（新羅）	石築	楕円形
7	大母山城	ソウル市江南区	293	567	山	三国（新羅）	石築	楕円形
8	虎巖山城	ソウル市衿川区	347	1547	山	三国（新羅）	石築	楕円形
9	陽川古城	ソウル市江西区	75	380	山	三国（新羅）	石築	楕円形
10	中興山城	ソウル市／京畿道高陽市			山	高麗	石築	未詳
11	ソウル城郭	ソウル市		16700	平地+山	朝鮮	石築	楕円形
12	蕩春台城	ソウル市／京畿道高陽市			山	朝鮮	石築	不定形
13	北漢山城	ソウル市／京畿道高陽市	836	3716	山	朝鮮	石築	不定形



図1 百済 風納土城（左）と夢村土城（右）

半ば以降新羅が使用した遺構と遺物が確認されているが、城壁を大々的に修築して利用した痕跡が認められないことから、主に百済の城郭遺産として検討されている。また、王城外郭の防御城として炭川と漢江の合流地点に位置する三星洞土城は、奉恩寺の北斜面で遺構が確認されたものの、江南地域の都市化によって、全体的な範囲と性格は必ずしも明らかではない。さらに、百済王城の漢江対岸の峨嵋山には百済の阿旦城が存在したことが史料からうかがえるが、現在、発掘調査によって百済の城郭遺産の痕跡は確認されていない。そのため、ソウルの百済城郭遺産としては、風納土城と夢村土城がメインとなる。

475年、高句麗の南進によって百済の蓋鹵王が最後を迎えた阿旦城の位置する峨嵋山一帯には、高句麗の城郭遺産が集中的に存在している。現在、礼成江以南の地域では、周長1km以上の高句麗の石築城は確認されておらず、臨津江－中浪川－漢江に至る交通路に沿って小規模の堡壘が集中的に造成されている。峨嵋山の高句麗堡壘はおおよそ6世紀前後に築造されたと判断される。堡壘は山頂部に土石によって築造された周長300m未満の小規模城郭であるが、多数の堡壘が点在して防御線を構築しているところに特徴がある（図2）（白種伍 1999）。

峨嵋山では7カ所の堡壘が、峨嵋山と連結する紅蓮峰には2カ所の堡壘が確認されている。峨嵋山と向かい合う龍馬山には8ヶ所、峨嵋山と龍馬山が合流し北に伸びた忘憂山にも3ヶ所の堡壘が存在する。峨嵋山から東に独立した京畿道九里市の丘陵にはシル峰堡壘を含め、峨嵋山一帯には20ヶ所の堡壘が配置している。これ以外にも漢江沿いには現在消滅した九宜洞堡壘が、中浪川西側の拝峰山と烽火山にもそれぞれ1ヶ所の堡壘があり、さらに、ソウルの最北に位置する水落山にも3ヶ所の堡壘が認められる。

近年、新たに確認されたいくつかの堡壘を除けば、これらは峨嵋山一帯堡壘群として史跡に一括指定されている。このうち、ソウルの紅蓮峰1・2堡壘、峨嵋山3・4堡壘、龍馬山2堡壘、シル峰堡壘、拝峰山堡壘、ソウル市東の九里市シル峰堡壘では発掘調査が行われ、そのうち峨嵋山4堡壘、シル峰堡壘では、城壁が整備されている。なお、紅蓮峰1・2堡壘は現在整備中で、残りは埋め戻されている（尹星鎬 2019a、尹星鎬 2019b）。

6世紀半ば以後、ソウルを支配したのは新羅である。新羅は高句麗の堡壘が散在する峨嵋山に周長1,043mの峨嵋山城（図3）を築造し、新州（北漢山州）の治所とした。新羅北境の中心地で、州治所防禦のため、さらにその北に仏巖山城、南に大母山城、東に陽川古城と虎巖山城が築かれている。大母山城を除外すれば、新羅の城郭遺産はすべて発掘調査によって、部分的ではあるものの、性格が明らかになっている。これらの新羅の山城は、統一新羅以後、軍事

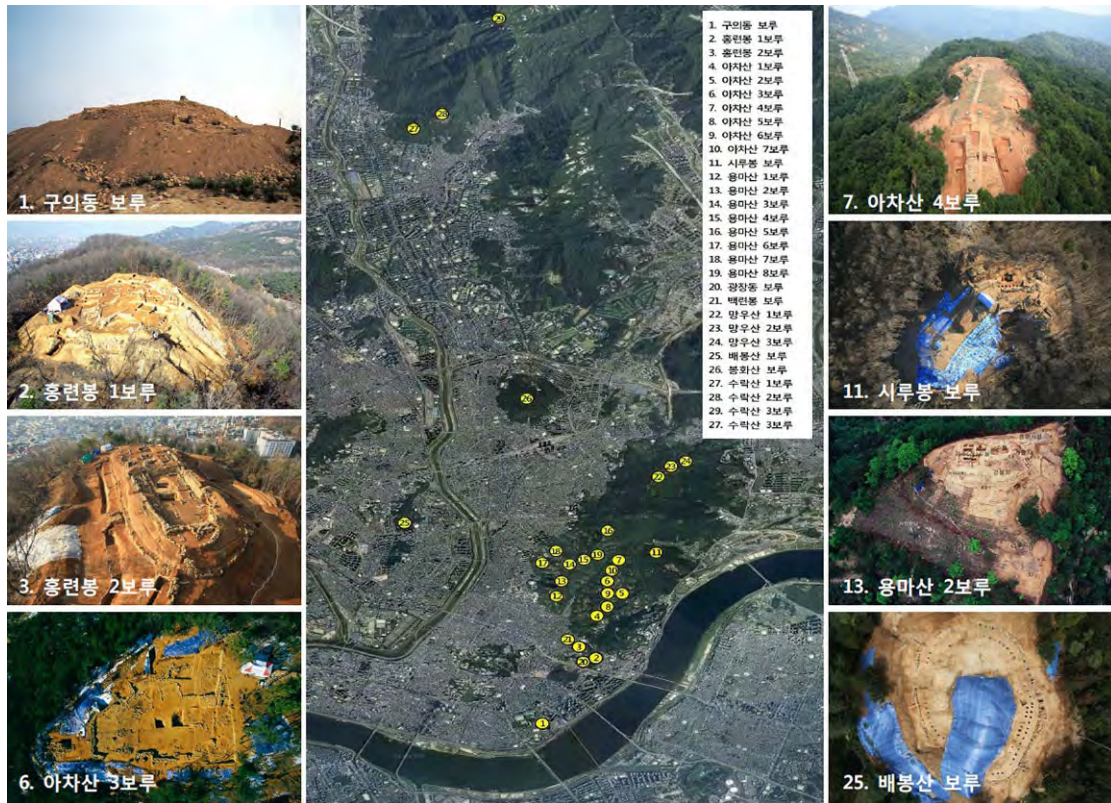


図2 高句麗峨嵯山一帯堡壘群の配置



図3 新羅 峨嵯山城

的な目的よりも行政所としての機能が強化され、後三国時代まで活用された。高麗以降は、ソウルの軍事的機能の低下により、それらはもはや活用されなくなる。調査された新羅城郭遺産では、峨嵯山城のみ整備が行われ、残りの山城は埋め戻されたり、整備が行われていない状態である（尹星鎬 2023a）。

これまでみてきたように、ソウルは長期間に及ぶさまざまな城郭遺産が分布している（図4）。それらは他地域に比べ発掘調査と整備が継続的に行われている。百済の風納土城と夢村土城、高句麗の峨嵯山一帯堡壘群（紅蓮峰1・2堡壘、峨嵯山4堡壘、シル峰堡壘）、新羅の峨嵯山城については整備もされ、文化遺産活用事業も進められている。そこで、以下、こうした活用事業について、節を改めて論及していこう。



図4 ソウルの古代城郭遺産

3. ソウルの古代城郭遺産の活用事業分析

(1) 文化遺産活用事業の推進現況

韓国の「文化財保護法」では、文化財庁と地方自治団体は、文化遺産の保存・管理、その活用に関する施策を樹立・推進することが強調されている。文化遺産の活用とは、文化遺産に込められた価値を見出し、新たな生命を吹き込んだり、変容させ新たな文化的価値を創造することと定義されている（장호수 2006、신희권 2018）。文化遺産の活用は広範囲に及ぶが、いくつかのカテゴリーに分類可能である。その中心となるのが、教育的側面における学校教育と社会教育分野、経済的側面における資源化と商品開発、社会的側面における歴史文化の固有性の確立と歴史的再創造過程による伝統づくりである（박지영 2023）。こうした活用事業のうち、実際に活発に実施されているのは、文化財庁の総括のもと、自治体と民間団体が主管して 2008 年から進められた「地域文化財活用事業」である。地域文化財活用事業は「生き生き文化財事業」から始まり、該当する文化遺産の性格によっていくつかに分かれている。2014 年に「郷校・書院事業」、2016 年に「文化財夜行事業」、2017 年に「伝統産業史事業」、2020 年に「古宅・宗家事業」に分離されたが、概ね参加者の文化遺産体験を中心とした事業となっている⁽¹⁾。城郭遺産においても、生き生き文化財事業が進められている。最近 3 年間における生き生き文化財事業と城郭遺産事業の進行現況は、以下の表 2 の通りである。また、ソウルと首都圏（仁川、京畿道）の城郭遺産活用事業の現況は表 3 のようになる。

生き生き文化財事業のうち、城郭遺産活用事業は全国的に見ると 8% で、首都圏では 18 ～ 25% と相対的に比重が高い。これは首都圏に前近代の都城とその防禦のための城郭遺産が密

集しているためである。表2の全国城郭遺産事業には京畿道龍仁市の高麗時代の処仁城、金浦市徳浦鎮の朝鮮時代の城郭遺産が含まれているが、この二つを除けば、首都圏地域における古代城郭遺産を対象とした活用事業は6件となる。しかし、2023年に2件が公募に落選したため、現在は4件のみである。

ソウルでは古代城郭遺産のうち、松坡区で百済風納土城、広津区で高句麗峨嵯山一帯堡壘群と新羅の峨嵯山城、衿川区で新羅の虎巖山城を対象とした事業が進められている。京畿道漣川郡では、2022年まで高句麗瓠蘆古壘城を対象とした活用事業が推進されたが、それは漣川郡全谷里遺跡と崇義殿を含んだ広範な活用事業の一部で、広津区での峨嵯山一帯堡壘群と峨嵯山城を連携させた該当城郭遺産のみを対象とした活用事業や、衿川区での虎巖山城を中心とした活用事業とは相違する。もっとも、松坡区では幅広く風納土城と石村洞古墳群と一体化した活用事業が推進されている。

一方、2018年から文化財庁では、文化遺産の教育的側面に焦点を絞った、地域文化財活用事業とは別の事業が進められている。2006年に民間団体を中心とし、学校連携教育としても進められた「文化遺産訪問学校」と、2011年以後推進された民間団体の考古学体験教室支援プログラムを、文化財類型別体験教育に発展させて、「文化遺産体験教室」と設定している。さらにここにテーマ中心の教育プログラムである「テーマ文化財学堂」を追加し、「地域文化遺産教育事業」という自治体公募事業へと発展させている。2023年には、その性格が曖昧であったテーマ文化財学堂を廃止し、文化遺産訪問学校と体験教室を併合したプログラムも選定されている⁽²⁾。これらの最近三年間の事業状況を整理したものが以下の表4である。

表2 文化財庁生き生き文化財事業の中の城郭遺産活用事業現況

年度	全 国		首都圏	
	総事業	城郭遺跡活用事業	総事業	城郭遺跡活用事業
2021年	160件	13件(8%)	32件	8件(25%)
2022年	165件	13件(8%)	29件	8件(25%)
2023年	165件	12件(8%)	33件	6件(18%)

表3 ソウル及び首都圏地域の生き生き文化財事業中の城郭遺跡活用事情現況

	地域／城郭遺跡			2021年度	2022年度	2023年度	主管団体
1	ソウル	松坡区	風納土城 夢村土城	百済、 復活の夢	韓流の源泉 百済を見る	韓流の源泉 百済を見る	(社) 文化生活
2		広津区	峨嵯山城 峨嵯山一帯堡壘群	峨嵯山 ヤッホー	峨嵯山 ヤッホー	×	(財) 漢江 文化財研究院
3		衿川区	虎巖山城	虎巖山城 오픈이흥興	何して遊ぶ？ 虎巖山城 広報マン	虎巖山城 それが 知りたい	教育分業 協同組合
4	京畿	漣川郡	瓠蘆古壘	漣川、Corea を談ず	漣川、Corea を談ず	×	漣川郡庁
5	仁川	弥鄒忽区	文鶴山城	比流、 文鶴山城に 明日を抱く	文鶴山に隠れた 比流王の 星明かり夜行	比流、 文鶴山城に 明日を抱く	弥鄒忽区
6		桂陽区	桂陽山城	生き生き 桂陽山城	生き生き 桂陽山城	生き生き 桂陽山城	桂陽区庁 桂陽文化院

表5からも明らかなように2021年以降、地域文化遺産教育事業のうち、城郭遺産を含めた、現場で文化遺産を活用する文化遺産体験教室は、大衆考古学を追加した、広津区での峨嵯山一帯堡壘群と峨嵯山城をテーマとしたプログラムが唯一である。文化遺産訪問学校とテーマ文化財学堂では、城郭遺産をテーマとした多様な事業も進められたが、古代城郭遺産を取り扱ったのは松坡区での風納土城を対象とした事業のみである⁽³⁾。ただし、松坡区のプログラムは、地域文化遺産教育士養成教育が中心で、それらの文化遺産活用と多少相違する。

つまるところ、ソウル地域で城郭遺産を活用した文化遺産活用事業は、生き生き文化財事業と地域文化遺産教育事業のみということになる。生き生き文化財事業では、松坡区の風納土城と衿川区の虎巖山城の活用事業が目される。この二つの事業と同時進行中なのが、広津区の峨嵯山一帯堡壘群と峨嵯山城活用事業である。ソウル市の探求学習においては、いまだ古代山城遺跡が対象事業に選定されたり、独自の文化遺産活用事業として進められたものはない⁽⁴⁾。

(2) 松坡区での百済風納土城と衿川区での新羅虎巖山城活用事業

松坡区では、2013年に「蘇る漢城百済古代歴史復活の夢」が生き生き文化財事業に選定され、(社)文化サルリム(旧ウリ歴史文化研究会)の主管する、百済風納土城を活用した事業が進行中である(図5)。これは漢城期の百済の文化遺産を全般的を活用するという立場から、風納土城だけでなく石村洞古墳群までを含むプログラムとして運営されている。

風納土城は保存と開発という問題がありながらも、城壁を中心とした整備が行われ、訪問可能な公園となっている。特に城内での発掘調査後、保存された再建築地には、小規模な公園も造成されている。このうち2013年には、風納土城の未来マウル(村)の敷地に風納百済文化公園が設けられ、生き生き文化事業進行のための基盤ともなっている。同年から始まった生き生き事業では、ここに体験ブースが設置され、国楽、伝統舞踊公演などを結合した文化体験プログラムが進められている。ただこの10年余りの間、プログラムに大きな変化はなく、同一プログラムを毎年繰り返しているのが実情である。持続的なプログラムの進行は肯定的側面もあるが、環境が目まぐるしく変化し、急速なデジタル化が進む時代にあっては、訪問客のニーズを満足させる上で限界があるとおもわれる。

表4 文化財庁地域文化遺産教育事業現況(2021-2023年)

年度	地域文化遺産教育事業(城郭遺跡活用プログラム)			
	文化遺産訪問学校	文化遺産体験教室	テーマ文化財学堂	文化遺産訪問+体験
2021年	26(2)	11(1)	6(2)	—
2022年	23(0)	12(1)	8(1)	—
2023年	30(3)	12(1)	—	4(1)

表5 ソウル及び首都圏地域の地域文化遺産教育中、城郭遺跡活用事情現況

	地域／城郭遺跡		2021 年度	2022 年度	2023 年度	主管団体	
1	ソウル	松坡区	風納土城 夢村土城	悠久な百済の 都市、松坡を 知ってますか	×	松坡から漢城 百済を学ぶ	(社) 文化生活
2		広津区	峨嵯山城 峨嵯山一帯堡壘群	すべての 文化財 峨嵯山	峨嵯山、 どうなっ ているの？	峨嵯山、 どうなっ ているの？	(財) 漢江 文化財研究院



図5 松坡区の百済風納土城を活用した生き生き文化財事業

最近では、ロッテタワー展望台から夢村土城を含む百済の遺跡を眺めながら、解説を聞くというプログラムも進められており、それらは時代的变化に即応した活用事業の好例として位置づけられる。良好な基盤施設と、継続的な発掘現場を併せ持つことは、大衆考古学と結び付けられた体験学習のための最高の条件を備えているものの、それに付随する関連プログラムは進められていない。風納土城では、生き生き文化財事業推進以後、2015年には東城壁外側で堀の、2017年から現在までは西門址一帯の発掘調査が進められている。こうした好条件にもかかわらず、風納土城の城壁踏査にとどまっていたり、風納百済文化公園内の体験ブースにおける期間限定的プログラム実行のみというのは残念である。夢村土城はオリンピック公園として整備され、アクセスや活用度は非常に高い上、文化遺産活用のための基盤ともなる漢城百済博物館も位置し、漢城百済博物館の百済学研究所も、2013年から夢村土城内域の持続的発掘調査を実施しているにもかかわらず、夢村土城を対象としたプログラムは運営されていない。

現在、活用事業主管団体では、漢城百済博物館と共同で解説や遺物観覧を行ったり、講義室を貸し出して体験プログラムを行っているが、夢村土城そのものを活用しているとは言い難い。こうした問題は、自治体である松坡区と事業遂行団体が、風納土城を調査している国立ソウル文化財研究所、夢村土城の管理主体である体育振興公団、漢城百済博物館の運営主体であるソウル特別市と協議していない、という現実的課題に起因している。一方で、松坡区・松坡文化院主催、漢城百済文化祭推進委員会主管の漢城百済文化祭が、1994年から2023年まで計22回開催されている。この漢城百済文化祭は、漢城百済の中心地である松坡区の地域アイデンティティ向上のために、夢村土城のあるオリンピック公園を中心に開かれたフェスティバルで、オリンピック公園周辺でのパレードとオリンピック公園内の百済体験村において、さまざまな体験活動が行われるなど、夢村土城を活用したプログラムが進められているが、生き生き文化財事業とは連携できていない。

松坡区には漢城百済の王城という素晴らしい遺跡と良好な基盤施設が備わっているが、そのことはソウルの他の城郭遺跡とは異なり、長期間にわたって住民の財産権と文化遺産保存問題が表出することを意味する。住民の積極的な関心と協力が低調な現状において、風納土城を積極的に文化遺産として活用する上で、現実的課題があることも見過ごせない。これは積極的な文化遺産の活用を通して、地域のアイデンティティを確立しながら解決していかなければならない課題であることも考慮する必要がある⁽⁵⁾。



図6 杣川区の新羅虎巖山城を活用した生き生き文化財事業

杣川区では2018年に「私が描いた生き生き虎巖山城」で生き生き事業に選定され、2023年まで虎巖山城を活用した文化財事業が継続して進められている。杣川区住民の多くは同地出身で、松坡区と比べても地域への愛着が強い。もっとも、虎巖山城は地域アイデンティティを代表する文化遺産として認定されるのに、かなりの時間を要した。こうしたなかで2018年から2020年まで（株）コリアヘリテージセンターが事業を主管し、それ以後、杣川区管内の教育分業協同組合がプログラム運営を担当する虎巖山城活用事業が進められている（図6）。

新羅の虎巖山城は冠岳山の裾に位置しており、杣川区も急傾斜の高地に位置しているため、アクセスが非常に悪い。2020年から虎巖山城歴史文化道整備事業が進められ、2023年からは城内部で発掘調査も行われているが、現状、虎巖山城の環境状況は必ずしもよくない。このような悪条件にもかかわらず、虎巖山城の活用プログラムが継続して進められていることは非常に重要である。ただ虎巖山城の活用基盤施設の欠如が、それら活用事業の障害となっている。これまでは山城と無関係な場所で、教育プログラムが行われたり、山城への登山道の入り口で演劇や体験活動が実施されてきた。しかし、虎巖山城ならではの独自のストーリーテリング（ストーリー仕立ての語り）などを欠いた下で、訪問プログラムのみが進められているという状況は、今後、改善する必要がある。

（3）広津区の高句麗峨嵯山一帯の堡塁群と新羅峨嵯山城の活用事業

広津区は高句麗峨嵯山一帯堡塁群のうち、10カ所の堡塁と新羅の峨嵯山城を管理している。当該遺跡は山の中にあるが、進入路から遺跡まで10分以内で到達可能で、他の山城に比べてアクセス良好である。また、進入路入口には峨嵯山生態公園が作られ、さまざまな設備が整備されている。このような状況をふまえ広津区では、広津区独自の予算で2003年に峨嵯山郷土資料室を設置し、峨嵯山一帯の堡塁群と峨嵯山城訪問プログラムを開始した。また、2009年には峨嵯山歴史文化広報館を開館し、訪問客への解説と教育プログラムを進めている。

こうした経験をもとに、広津区は2011年に「古代のタイムマシン、峨嵯山への時間旅行」で生き生き文化財事業に選定された。主管団体は発掘調査機関である（財）漢江文化財研究院で、2015年まで事業を進め、その後、2018年に再度選定され、2022年まで継続された。2008年、生き生き文化財事業が施行された際には、埋蔵文化財発掘機関において、体験学習がしばしば行われたが、現在、調査機関が直接体験学習を実施しているのは珍しい⁽⁶⁾。

これまでの活用事業基盤をふまえて、紅蓮峰2堡塁進入路入口に発掘調査体験場が設置さ

れた。これによって2013年から進められた紅蓮峰堡壘発掘調査と、2015年以後進行する峨嵋山城発掘調査現場を連携させた、大衆考古学の実験場の性格を兼ね備えるものとして近年注目されている発掘調査体験教室と城郭遺産訪問プログラムが同時に実施されることとなった。これによって多くの人々が参加し、それをふまえた体験のための教材キットと複製遺物の製作も毎年行われるようになり、プログラムの内容も発展していった。

2016年、全国の生き生き文化財事業のうち、優秀事業を主体的に推進させるための選定は行われておらず、訪問プログラム以外の事業も一時中断された。しかし、2018年には、発掘調査体験にストーリーテリング（ストーリー仕立ての語り）や劇場体験型などのプログラムを補強した、生き生き文化財事業に再度選定された。また、2018年から始められた地域文化遺産教育事業では、「三国時代の真実ゲーム with 考古学」というプログラムも選定され、現在まで関連該当事業の中で唯一、考古学体験プログラムが進められている。

地域文化遺産教育事業は方向性を改め、広津区でのソウル童話祝祭期間に発掘調査体験ブースが設置され（図7）、遺構や遺物の復元などの体験プログラムである、峨嵋山文化財遊場も運営されている（図8）。祭りと連携した活用プログラムは、多くの人々が制約なく遺跡にアクセスでき、コンテンツを享受できるという利点もあるが、臨場感をふまえた城郭遺産の意味を伝えるためには、より多様なコンテンツの開発が必要であるということも提起されている（강평원 2018）。しかし、その後、ソウル童話祝祭は2019年以降のパンデミックによって開催されず、2020年からは2つの事業の担当分野が整理された。2020年、パンデミックによる直接体験が不可能になったことによって、映像コンテンツの製作や体験キットを利用した在宅体験型のオンラインコンテンツが提供されるようになった。やむを得ないことではあったが、これを契機としてデジタルコンテンツの整備・活用の重要性が認識されることとなった。2021年からの生き生き文化財事業では、峨嵋山城進入路入口の舞台で、峨嵋山城と温達を主題とした演劇、峨嵋山城内部の平坦地での弓矢体験など、城郭遺産にあわせた体験プログラムも担当するようになった（図9）。他の事業では、当該自治体の文化遺産や歴史全般をテーマにした演劇や公演が繰り返し開催されているが、峨嵋山での関連した演劇は、広津区の演劇集団とアウトソーシングを通じたミュージカル形式の観客参加型演劇となっており、これは現状に応じ即興的に内容も変化するため、プログラムへの再加入を誘導するというメリットがある。また、これまで先史遺跡で大衆考古学を実施していた団体と連携して、実際の弓矢を利用した弓矢体験は、城郭遺産の性格を理解する上で、適切なプログラムとなっているとの評価を受けている。

地域文化遺産教育事業は、既存の生き生き事業で推進された発掘調査現場での体験教室を中心に再編され、高句麗峨嵋山一帯の堡壘群現場と連携した発掘調査体験場では、遺物の発掘、実測、復元も進められた上に、中高校生への職業体験という性格までも兼ね備えるようになった。なお、広津区では紅蓮峰2堡壘に体験と教育空間を兼備した遺跡展示館が整備され、事業基盤施設の拡張によって、活用事業推進のための環境は、よりよくなっていくものとおもわれる（尹星鎬 2023b）。



図7 広津区の文化遺産活用事業：発掘調査体験教室



図8 広津区の文化遺産活用事業：ソウル童話祝祭と連携した文化財遊戯



図9 広津区の文化遺産活用事業：観光客参加型演劇、嵯峨山城内弓矢体験

4. 結論：古代城郭遺産の活用事業活性化のための提言

これまでソウルの城郭遺産の現況と国内の文化遺産活用事業のうち、文化財庁が支援する生き生き文化財事業と、古代城郭遺産と関連する地域文化遺産教育事業の事例について論及してきた。ソウルには数多くの三国時代の城郭遺産が存在するが、実際に遺跡訪問以上の事業が進められているところは決して多くないことも明らかになった。その一方で、百済王都の風納土城・夢村土城の活用事業が松坡区で、高句麗峨嵯山一帯堡壘群と新羅峨嵯山城の複合遺跡に関

する事業が広津区で推進され、発掘調査や整備が初期段階ではあるものの、衿川区では新羅虎巖山城を対象とした事業が進められていることを述べてきた。

もっともこれらの事業は、当該自治体と主管団体によって、プログラムの内容に差があり、特に風納土城は、多くの人々に認知されているものの、その活用は決して活発であるとはいえない。そこで、ソウルの古代城郭遺産の積極的活用に関わるいくつかの提言を、最後に述べておきたい。

第一に、古代城郭遺産の活用事業は教育中心ではなく、誰もが共感して楽しめる体験型コンテンツを提供するプログラムでなければならないことである。文化遺産は保守的な側面が強く、保存とそのための教育が強調されてきた。しかし、一方的に文化遺産の大切さと歴史文化的価値のみを詰め込むのは、活用事業を無味乾燥なものにさせてしまう。活用事業は持続的なストーリーテリング（ストーリー仕立ての語り）と新技術を活用した五感体験型の楽しいプログラムでなければならない。これをふまえて学生だけでなく、すべての人々が参加可能な多様なプログラムを開発する必要がある。首都圏郊外で実施されている古代山城活用プログラムのうち、仁川の文鶴山城の生き生き事業は、古代の戦争、歴史的意味の教育から離れ、山城が安全を守る施設であったことをふまえた安全体験教室も同時に進めている。広津区の生き生き事業の観客参加型演劇でも、高麗時代以降、廃城となり長期間放置された城壁を擬人化し、自然保護と文化遺産整備による生命の尊さを認識できるようなものとなっている。このような事例を参考にする必要があろう。

第二に、それぞれの古代城郭遺産が有する意味を明確に認識し、それに合わせた独自のストーリーテリング（ストーリー仕立ての語り）が反映された活用事業を進める必要がある。これまでに推進された活用プログラムでは、場所・時間・内容が考慮されず、同じようなプログラムが繰り返し行われてきたところも多い。城郭遺産では、時代性やそこで起こったさまざまな歴史的事実などにもとづき、それらの意味を把握し、活用のための方向性が示される必要がある。風納土城では、百済王都の側面のみが強調され、実際の体験や教育では、漢城百済の一般的内容が繰り返されることが多い。虎巖山城では、調査・研究がそこまで活発ではないこともあって、必ずしも山城の歴史的意義が把握されていないのが実情である。このような独自の意義を欠如した活用事業が繰り返されれば、結局、それへの参加も低調となってしまう。特に人口の少ない地方において、何年間も同一プログラムが繰り返されると、ほぼすべての学生が当該プログラムの参加経験者となってしまう、それ以上に関心を持ち得ないという事例も増えている。ソウルおよび首都圏は、他の地方に比べて活用事業の対象者は多いものの、それでも新たなコンテンツ開発・提供がおろそかになれば、活用事業に対する関心が低減するのは明らかであろう。

第三に、持続的な活用事業のための自治体の関心の高まりと主管団体の積極的な支援による能力向上を強化しなければならない。遺跡保存が強調されていたこれまでと比べ、現在では文化遺産活用の重要性が重視されているが、依然として自治体では文化遺産保護と開発という問題から明確な道筋が示されていない。こうした状況において中央政府と自治体は、正しい文化政策の方向性を策定し、それにもとづいた継続的予算・行政支援を提供する必要がある。これまで論及した活用事業のなかには、公募事業に落選し、一時的に事業が中断されたものもあったが、そもそも予算の問題や自治体の無関心さによって、事業に応募しないところも多い。また、公募で選出された事業についても、中断されないように自治体は主管団体を積極的に支援

しなければならず、活用事業の基盤整備のためにも、自治体は中央政府と緊密に協議を行う必要がある。さらに、自治体は城郭遺産に対する管轄機関や部署間での意見の相違などに対して、相互調整して協力できるようにしなければならない。

行政基盤の整備によって、実際に事業を遂行する民間主管団体は、安定的に事業を遂行できるようになる。こうした経験の蓄積によって、主管団体の活用事業能力も増進するであろう。

第四に、地域住民が該当地域の文化遺産の価値を認識し、地域アイデンティティを確立するために、地域学の観点から研究と関心を強化しなければならない。ソウルには 25 区があるが、大部分のソウル市民は、自分の居住区に対する帰属意識が希薄である。現在のソウルは朝鮮時代の漢陽都城郊外の京畿を取り込み拡大しながら形成されてきた。ソウル東部圏は楊州、ソウル西部圏は高陽、漢江以南の南東部圏は広州、西南部圏は始興がそれらに該当するが、それら漢城郊外に拡大した地域は行政的に編入されただけで、住民たちの地域アイデンティティは高くない。また、移住民も多いため、所属自治体の文化遺産への関心も低い。現在、小学校 4 年生の社会では、自治体ごとに文化遺産に対する教育が進められているが、必ずしも地域アイデンティティを確立するまでには至っていない。

このような問題を解決するためには、所属自治体ごとの地域学を確立させなければならない。漢陽都城と隣接する城北区とは地域的相違はあるものの、城北区と城北文化院が中心となって推進している城北学定立の努力は、それらを追究する上でも参考される必要がある。それぞれの自治体の努力によってさまざまな地域学が確立された時、現在、それほど関心の対象となっていない古代城郭遺産の重要性も認識され、活用事業も活発に進められるであろう。

註

- (1) 2024 年から地域文化遺産活用事業と細部事業の名称が変更される予定である。
- (2) 文化財庁が公示した 2024 年地域文化遺産教育事業公募には細かなテーマに変化がない。
- (3) 朝鮮時代の城郭遺産を対象としたプログラムはこれ以外にもある。文化遺産訪問学校は、2021 年の金浦文殊山城、2023 年の高陽幸州山城、蔚山開雲浦城を対象としたプログラムが進行中である。文化体験型は 2023 年に蔚山兵營城プログラムが、テーマ文化財学堂は 2021 年に晋州晋州城、聞慶聞慶鳥嶺、2022 年にソウル城郭を対象としたプログラムが行われている。
- (4) 松坡区で推進中の地域文化遺産教育事業は、解説士養成教育を主たる目的とするため、以後の分析からは除外している。
- (5) 巨視的にみればソウルのイメージを創出するのに重要な資源となるという指摘がある（権五栄 2013）。また地域住民の解説士など、専門家の養成を強化させ、住民参加を通じた共感の形成も活用事業の方向として設定する必要がある（윤수희 2017）。
- (6) これらのプログラムでは専門性を有する埋蔵文化財調査機関によるわかりやすい言葉と方法によって、当該文化財の歴史的価値とその意味を人々に伝えられている（박지영 2023）。2023 年、ソウル広津津区の事業以外にも、京畿安陽市と（財）漢陽文化財研究院、忠北沃川郡と忠清北道文化財研究院、済州市と（財）済州考古学研究所の 3 件においてこうした事例が認められる。

参考文献

- 江南区・漢陽大学校 文化財研究所 2011 『大母山城 保存 및 活用計畫 樹立 研究』
- 江西区・한얼文化遺産研究院 2009 『陽川古城址 整備 基本計畫 樹立을 위한 學術研究』
- 강평원 2018 「三国時代 遺跡을 活用了한 大衆考古學的 接近—서울 童話祝祭에 参与하며—」 『第 42 回 韓國考古學全國大會 發表文』 韓國考古學會
- 京畿文化財團 2015 『北漢山城 城廊址 및 城壁 學術 發掘調査』
- 京畿文化財團 2017 『北漢山城 綜合整備 計畫』
- 權五榮 2007 「百濟 漢城都邑期 文化遺産의 分布樣相과 活用方案」 『漢城百濟의 歷史와 文化』
- 權五榮 2013 「서울 市內 百濟遺跡의 保存과 活用方案」 『古文化』 81 韓國大學博物館協會
- 衿川區・漢江文化財研究院 2014 『서울 虎巖山城 綜合整備 基本計畫』
- 박지영 2023 「坡州 七重城의 活用方法」 『坡州 七重城의 歷史의 價值와 活用』 坡州市・漢百文化財研究院
- 白種伍 1999 「京畿北部地域 高句麗城郭의 分布와 性格」 『京畿道博物館年報』 3 京畿道博物館
- 白種伍・김병희・김주홍 2001 「京畿・서울・仁川地域 閼防遺蹟의 研究 現況」 『學芸誌』 8
- 안성현 2018 「京畿・서울 地域 城郭遺産 研究 現況과 保存・整備 方向」 『城郭遺産의 研究成果와 保存整備 方向』 (2018 南漢山城 學術심포지엄 資料集) 京畿道南漢山城世界遺産센터
- 서울大學校博物館 1990 『한우물 —虎岩山城 및 蓮池發掘調査報告書—』
- 蘆原區・京畿道 南楊州市・國防文化財研究院 2016 『仏巖山城 綜合整備 基本計畫』
- 서울市立大學校 서울學研究所 2003 『서울所在 城郭調査 報告書』
- 松坡區・松坡文化院 2013 「서울市內 百濟遺跡의 保存과 活用方案」 『古文化』 81 韓國大學博物館協會
- 신희권 2018 『文化遺産學概論』 社會評論아카데미
- 尹星鎬 2019a 「南漢地域 高句麗 閼防施設의 研究 成果와 課題」 『軍史』 110
- 尹星鎬 2019b 「峨嵯山 一帶 堡壘群 補修整備와 向後展望」 『先史와 古代』 60
- 尹星鎬 2023a 「漢江遺蹟 古代 閼防遺蹟 調査・研究 現況—高陽 덕절山土城과 서울 陽川古城을 中心으로—」 『先史와 古代』 71
- 尹星鎬 2023b 「서울地域 高句麗 堡壘의 遺構保護施設 適用方案 研究」 『東아시아古代學』 71
- 윤수희 2017 「서울 百濟歷史遺蹟의 保存・活用과 市民参与」 『서울 百濟遺蹟의 世界遺産의 價值와 保存・管理』 서울特別市
- 장호수 2006 「文化財 活用論—活用的 概念과 범주에 대하여—」 『人文콘텐츠』 17
- 漢江文化財研究院 2023 『虎巖山城 (第 2 우물址 및 周邊 建物址) 內 遺蹟 精密發掘調査 學術諮問會 資料集』
- 한얼文化財研究院 2016 『서울 陽川古城址』 (1-3 次調査結果)
- 한얼文化財研究院 2019 『서울 陽川古城址』 II (4-5 次調査)
- ※日本語訳翻訳にあたり、参考文献の記載を一部改めたところがある。

編集後記

2020年に始まる「湯舟坂プロジェクト」は早くも6年目に突入している。教員生活のほとんどを久美浜に捧げてきたといえば大げさだが、府大に着任したのが2018年なので、私だけでなくたくさんの教え子がそれまで縁もゆかりもなかった久美浜に足繁く通ったことは確かである。3回分の成果報告会資料集をまとめて一書にしようと、気軽な気持ちで本書の制作を思い至ったが、皆さんお忙しく、思いのほか難産だった。スケジュールに追われる中、献身的に編集作業を手伝ってくれた二人の大学院生には感謝してもしきれない。

なお、湯舟坂プロジェクト立ち上げ時から一緒に仕事をしてきた、菱田哲郎先生が今年度でご退職される。まだ隣の研究室には山積みの荷物があるので実感がわからないが、1994年に開設した府大考古にとって最大の岐路であり、寂しい限りである。様々な仕事を通じて文化遺産の地域資源化の重要性を教えていただいた学恩に感謝するとともに、兵庫県と接する久美浜にこれからも足繁くお越しいただければと思う。(い)

表紙写真

- 上左 双龍環頭大刀調査風景（諫早直人撮影）
上中 第2回 ACTR 成果報告会風景（栗山雅夫撮影）
上右 「つなプロ」風景（諫早直人撮影）
下 湯舟坂2号墳出土双龍環頭大刀（栗山雅夫撮影）
裏表紙写真 湯舟坂2号墳全景（南西から。栗山雅夫撮影）



京都府立大学文化遺産叢書 第33集

地域資源としての湯舟坂2号墳

編集 諫早 直人（京都府立大学文学部准教授）
発行 京都府立大学文学部歴史学科
〒606-8522 京都市左京区下鴨半木町 1-5
<https://kpu-his.jp/>
発行日 2025年3月6日
印刷 北斗プリント
〒606-8540 京都市左京区下鴨高木町 38-2